

■ トークセッション ■

国分寺の過去・現在・未来 — 新たな国分寺市史編さん事業に向けて —

(出席者) 井澤 邦夫・古屋 真宏・坂詰 秀一

荒井 秀規・西木 浩一・羽貝 正美

(司会) 依田 亮一

はじめに

司会 国分寺市は昭和三九年(一九六四)一月三日に、東京都で一四番目となる市制を施行し、令和六年(二〇二四)に市制施行六〇周年を迎えました。市では市制施行一〇周年を機に、国分寺市が歩んできた歴史をまとめるため、昭和五〇年に市史編さん室を設置し、昭和六一年から平成三年(一九九一)までに上・中・下巻の『国分寺市史』全三巻を刊行しました。その後、三十数年が経過し、今年度から新たな国分寺市史の編さん事業に着手することになりました。

そこで本日は、長年国分寺市で文化財保護・史跡整備でご指導いただき、前回の市史編さん事業にも携わられ

ました立正大学特別榮譽教授の坂詰秀一先生と、新たな市史で原始・古代・中世をご担当される明治大学兼任講師の荒井秀規先生、近世・近現代をご担当されます東京都公文書館課長代理・認証アーキビストの西木浩一先生、それから現代市制をご担当されます東京経済大学現代法学部教授の羽貝正美先生をお招きし、井澤邦夫市長、古屋真宏教育長とともに、新たな国分寺市史編さん事業に着手するにあたっての課題と展望について、対談をお願いいたしました。皆様、よろしく願います。

1. 新たな市史編さん事業に着手した経緯

司会 それでは、令和五年・六年の施政方針で、新た

な国分寺市史編さん事業の推進を語られました井澤市長から、市史編さん事業を再開したきっかけですとか思いについて、一言いただけますか。

市長 ちょうど今年が市制施行六〇周年という節目で、私は一年前に就任したものですから、市制五〇周年も経ております。そのときも一つの機会であったと思いますが、今度の六〇周年は、新庁舎も建設されるというところで、市にとって大きな節目の年です。そういう年に新たな国分寺市史を始めたいと思い施政方針を示し、市民の方々にもご理解をいただきながら進めていくことになりました。

前回の市史は平成三年に下巻が刊行されましたが、既に三十数年が経過し、市の姿や、取り巻く行政、文化等、全てが大きく変わりました。ここで今までの市史も踏まえたと、市史編さんを始めたいと思い、先生方にご協力をお願いした次第でございます。

昨年七月には「新たな国分寺市史編さん事業の実施」を教育委員会で決定し、本年二月には「新たな国分寺市史編さん基本方針」を市として決定しまして、いよいよ今年度から事業に着手するという段取りになりました。

新たに判明する史実もあると思いますので、ぜひ先生方に解き明かしていただけたらと思っております。

また、令和六年度までの「第一次国分寺市総合ビジョン」が終了して、令和七年度からは「第二次国分寺市総合ビジョン」がスタートしますので、長期的にこの国分寺市が歴史を持ったまちとして引き継がれ、また私どもの誇りであります歴史・文化が本当に豊かなまちとして、今後も市民の方々、また多くの方々にご理解いただけるような証を残していければと思っておりますので、ぜひよろしくお願い申し上げます。

2. 自治体史の編さんとは何か

教育長 坂詰先生は前回の国分寺市史、最近では府中市史、さらには伊東市史の編さんにも携わっていらつしやいますね。多くのご経験がある中で、この市史編さん事業を行う意義、意味を市民の方にもご理解していただく上で、まずはお話をいただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

坂詰 今、お話のありましたように、府中市は今、進



トークセッションで意見交換をする参加者

行中で、間もなく新府中市史が完成する予定です。ほぼ一〇年かかりました。非常に早かった。

ところが、地域史の編さんは大変でございまして、かなり長い時間をかけてやってきた例があります。多摩地域ですと、日野市は大体二〇年、東大和市も十数年、区部では品川区は、一回目が九年、二回目が四年。もう一つは台東区で、四年かかりました。それ以外、私の経験したところで、神奈川県では川崎市が八年、箱根町が一〇年、長野県では野沢温泉村が九年、それから今、お話しにあつた静岡県の伊東市が、大体二〇年です。

今まで一〇か所ぐらいの市町村史編さんに関わった体験から考えますと、やはり一〇年では難しい。しかし、品川区の場合は、区史は一回作ったものがございまして、新しく作るというときに前回の区史を改めて全部点検しました。結果、新しい区史は前回の仕事を十分生かしながらも、その後の新しい内容を踏まえて区史を作ることになりました。

それを基に大体二年ぐらいでやろうということで始めたのです。ところが、行政の資料は全部つけて欲しいとか、いろいろな要望が区民の方から出まして、着手し



坂詰 秀一氏
(国分寺市市史編さん推進委員会 副委員長)

てから区民の皆さんに区史を渡すまでに四年かかりまして、しかし、できたものはA4判の大冊です。けれども、内容は非常に濃くて、前回の区史と対照していただくと、非常にそのエキスが詰まっています。おまけに全ページカラーで作っており、非常に手間と時間がかかりました。そのような経験もあり、多摩地区で今後参考にしていただきたいのは東大和市です。東大和市史を見ていただきますと、通史とか資料編ではなくて、各時代の特殊な目的を持ったテーマにして一冊ずつ作っていきました。ですから普通の市史とは違う。一味違った資料を作ろう

ということをやってみたわけです。

そのようなことを通じて感じているのは、自治体史や地域の研究は大変だということです。そういう経験をすると、やはり他市の状況も検討していただいて、特色のあるものを作る、その方がいいのではないかと思います。また、できたものを市民の皆さんに知っていただく、これが一番重要であると思います。そういう観点から、台東区では大きな区史を作りましたが、それを全部文庫本にして、区民の方に買っていただくという希望がありました。そうしましたら、文庫化が活用されて結構売れました。やはり区民の方に買っていただく、読んでいただくという工夫が必要だと思います。

それから、台東区は上野・浅草を控えているものですから、外部から来た方が興味を持つ地域です。そういう方々にも売れるということを考えたわけです。また、伊東市の場合は、図説の伊東市史を作りました。これは市史としては非常に評判がよくて、売り切れてしまいました。増刷をしたという経験がございます。

地域史の編集の目的というものは非常に難しく、それぞれの地域の特性に基づいて、作っていくべきだろう

と思うのです。ですから国分寺市史を作る場合も、国分寺特有の市史づくりというものがあっていいのではないか。やはり市を見ていくためには、そこに残された資料を完全に蒐集^{しゅうしゅう}することが非常に重要です。悉皆^{しつがい}調査というのですが、それをまずやる必要がある。これができないと、市史を作るのは難しいだろうと思います。

それからもう一点は、資料を基にして、地域の歴史を広い立場から位置づけていく必要がある。これはまた大変な仕事ですが、最終目的をそこに持っていきませんといけません。地域の人は、例えば国分寺の歴史は国分寺だけ見ているわけではないです。東京の歴史であり、日本の歴史であり、世界の歴史である。そういう中で自分たちの住んでいる市の歴史を理解するのが必要ではないか。

また、伝説が案外なおざりにされていることがあります。伝説は民俗学の分野ですが、時期が分からないものが多いので、歴史資料の中で詳細にしていくという方法になろうと思います。

そういうことを考えますと、やっぱり単なる歴史というのではなくて、環境や市民の生活を踏まえた市史づく

りが必要だと思うのです。将来に託せる市史の作成といましようか、そういうことも考えていく必要があるのではないか。要するに市民の関心に即した、その市に即した地域性を持った市史を作ることが必要ではないか。そのようなことを考えています。

教育長 大変大切なことを示していただいたのかなと思います。長い時間をかけて市史の編さん作業を行っていくものであると。市民に読んでいただける、国分寺ならではのものを作っていかなければいけないということが改めて分かりました。今、お話を頂いたところで、ぜひほかの先生方からも少しそれを受け止めていただいて、一言ずついただけたらどうでしょうか。

司会 西木先生や荒井先生も国分寺以外で自治体史の編さんに関わっていらつしやいますが、坂詰先生のお話を聞いて一言いただけますか。

西木 そうですね、坂詰先生が今、お話になったのうかがっただけでも、ずっと大変苦労されてきたというのがよく分かります。共同作業ですので、なかなかスムーズにいかないことも事例としてはあるかと思えます。自治体史編さんで言えば、私の職場である東京都公文書

館も、実は明治三〇年代から始まった、当時の東京市史の編さん事業からスタートしております。やはり地域の資料を集めたり、保存したりということは、なかなか自治体史を編むという目的がないと、意識をして進まないことがあります。そういった意味では今回の市史は一つのチャンスであると思います。

既に前回の市史のときに目録もかなり整備されていますので、基礎ができています。ですからそれを踏まえながら、先ほど悉皆的な調査が必要と坂詰先生がおっしゃいましたけれども、やはりそういう地域の歴史資料とい



西木 浩一 氏（国分寺市市史編さん推進委員会
近世・近現代部会 部会長）

うものを改めて洗い直していく必要があります。それから今まで歴史資料と思っていなかった、例えば写真ですとか、そういったものも実は貴重な地域資料なのではないかと思えます。そういう新しい資料論といえますか、いわゆる古文書だけではない、いろいろなもの地域史を組み立てる素材になるという、そういう議論も踏まえながら展開していくと、市民の方もより多く巻き込みながらの市史編さん事業ができるのではないかなと、今の坂詰先生の話がうかがって感じてました。

荒井 実は私、生まれも育ちも台東区です。今、坂詰先生のおっしゃられた文庫本は実家にありますし、結婚して区外に出るとき、やはりもう一セットを区役所に行って買ってから外に出ました。それぐらいあれは評判がよいものです。手軽な文庫本なのです。

もう一つ、自治体史の編さんは長くかかるというお話がありました。神奈川県内で、私が関わりましたのは大磯町史、これはもう終わりましたけれども、二〇年ほどかかりました。また、現在、厚木市史にも関わっているのですが、これはまだ仕事が残っています、それも二〇年以上かかっています。自治体の規模にもよります



荒井 秀規氏（国分寺市市史編さん推進委員会
原始・古代・中世部会 部会長）

が、あと資料の豊富さにもよるのですが、やはりそれぐらい時間がかかっています。当初の計画はもう少しコンパクトにしようかと思うのですが、なかなかそうはいかないということです。改めて共通認識として持っていたらどうかいいのではないかなということを思った次第です。

それと私の勤め先の藤沢市は、市史編さんが昭和の時代に終わっています。もう一度やろうという企画はあるのですが、なかなか予算的なものもあつて出来ていません。国分寺市さんで新たな市史を作る動きがあるという

のは、非常に羨ましいですし、いい機会ですので、ぜひとも私も参加させていただきたいと思つた次第です。

昭和の頃の市町村史と違ひまして、今はカラーが必須ですし、あとCDをつけるとか、あるいは対市民向けにはダイジェスト版を作る必要があると思います。ただ、いきなりダイジェスト版は作れないですから、まずはしっかりとしたものを作つて、その上でもう一度かみ砕いたダイジェスト版を作つていければいいのかなと思つておられます。そのような形で、始めてしまうと長くなると思うのですが、市長さんも教育長さんもそのようなお考えの下に、新しい市史編さんを進めていただければと思つております。

司会 ありがとうございます。羽貝先生の現代市制部会では前回の市史では全く触れられていません。

羽貝 そうですね。

司会 扱われる時代は昭和三九年以降、六〇〜七〇年で、年代幅は短いのですが、でも残っている資料は膨大だと思つていますので、その辺のところで見通しなどを一言いただければ。

羽貝 皆様からすぐ長期の仕事になるといふお話が

ありました。先日も、一緒にやりましょうというメンバーが顔合わせも兼ねて集まって相談しているのですけれども、とにかく元気で完成させようという話をしたところですよ。個人的な仕事としては都市史、都市行政史を、しかも外国の都市を前提にやっていたものですから、一九世紀ぐらい、あるいはもう少し前から、土地台帳、古文書を格納している埃だらけの部屋に入って、しばらく格闘していた時期が若いときにありますけれども、こうした形の自治体史をお手伝いするのは初めてです。いろいろと本当に教えていただきながら進めたいと思っています。

この市制施行六〇年という節目に新たに、これまでのことにさらに補足するものもあるでしょうし、修正もあるかもしれません。現代史は初めてということで、新たに市史を編さんするというのに、誠に大きな意味があると思うのです。人の人生でいえば還暦というところから始まるわけですが、ゼロからスタート、原点に立って考えてみようという意味合いもそこに付け加えることができるかもしれません。灯台下暗しという言葉はありますけれども、今生きる人間にとっては、自分が生まれた

り、生きたり、生活したりしている場所の大きさがどの辺にあるのかとか、どういう変化をたどってきたかということは案外知られていないことかと思えます。

話は後に続くとは思いますが、多くの方がまさに住民として暮らしているながら、同時に少しずつ市民として成長していくという認識でおります。そのためにはやはり地域を知ることがものすごく大事なことだと思います。小学生、中学生とか、若い方々にも学校で学ぶ中でいろいろと共有していきましよう、予定されていますけれども、これもまた非常に大事なことで、それがその人の中に積み重なっていくのだろうなと思っています。

地方のある場所で、どんどん人口が減っているところがあります。東日本大震災の被災地でもありました。その地域のリーダーの一人の方が、若者が生まれ育った場所を離れていくことを妨げることはできないと言っています。けれども、その後は耳に残って、もう絶対忘れないのですけれども、送り出し方があるとおっしゃるのです。離れていくのは妨げられない、止められないけど、送り出し方がある。そうすると、やがて帰ってくる時もある



羽貝 正美 氏（国分寺市市史編さん推進委員会
現代市制部会 部会長）

るだろうし、離れたままかもしれないけれども、時々戻っていらつしやる。そういうときに何を思うかということをおつしやるのです。そういう意味では若い方、子どもさんがこういうことに触れていく、学んでいくという時間は決定的に重要だと思っています。

同時に上の世代の方々を見たらどうかという話なのですけれども、六〇年というのは文字どおり、恐らくは自分が生きてきた時間です。子どもの頃からいらつしやるとすれば、文字どおり自分がどのように生きてきたか、何が環境の中で変わったかなどということを本当にもう

肌で感じ取ることができると。こういうことなのだと思います。そういう生きてきた時間、時代そのもので、かつ現在進行形というところもあるので、まとめるということについては、やはりいろいろと工夫もいる、視点といいますが、軸が必要と思っているところです。いずれにしても、オーラルヒストリーなども含めて多様な観点視点を生かせるような、かつ、皆様が異口同音におつしやっておられますけれども、自分のまちだという感覚を持って読んでもらえる、読み続けようと、折に触れて開こうという、こういう市史にしたいなと思っっているところです。

司会 ありがとうございます。先生方のお話を受けて市長、教育長、何かございますか。

教育長 もう皆様のおつしやるとおりです。

市長 いや、本当に今、お話があったように、我々、長生きしていかないと、この市史の完成まで見られないのかなと思いましたが。あわせて、本当に私事で申し訳ないのですけれども、自分の親を亡くしたときに、親がどういう生き方をして、どうしてここの地に住んだのか、その前はどうかだったのかという、自分史から遡っていく

というのが、やはりすぐく意味があるのかな。もともとはこの国分寺はどうだったのか、だから自分がここに今いるのだという証になるものだなと感じます。

そういう意味で、先生方は本当にいろいろなご経験ををお持ちなので、我々の子どもたちが同じ思いになったときに、よりどころになる市史ができればありがたいなど、お聞きしながら考えていました。文庫本というのもありましたし、やはり読んでいただかないと意味がないので、どこかに立てかけておく市史ではなくて、身近なもの、親しめるものにしていければなど、そんな感想を持ったところでもあります。

3. 前回の市史のふり返り

教育長 坂詰先生からいろいろなご指導をいただいたわけですが、悉皆調査の必要性和、新たな調査もしていかなくはいけないと思いますし、また前回の市史以降も様々な調査を実施していますので、そういうものも生かしていきたいと思っていますところでは。

特に、最近発行しました多喜窪遺跡たきくぼの発掘調査報告書

(令和六年三月刊)では、坂詰先生に総括文を書いていただきました。そのなかで市史の上巻の一部に誤りがあるというご指摘がありました。やはりこの辺りも先輩の仕事を生かし、またその先輩のお仕事を確認していくところも今後必要になってくるのかなと思います。やはり新しく編集をしていくだけではなくて、過去のものも振り返りながら新しいものを作っていくという視点も必要なのかなと思っています。

司会 多喜窪遺跡は、戦後間もない頃に発掘調査が行われ、縄文時代の遺跡として有名な遺跡ですが、このほど市では調査報告書を刊行しました。坂詰先生に総括文を書いていただく中で、実は過去の市史に一部記述が間違っていたという新たな発見もございました。ちょっとその辺りのことを、先生からお話しをいただけましたらと思います。

坂詰 報告書については改めてお話ししますが、今、先輩のお仕事というお話がありました。前回の国分寺市史を皆さんもご覧になっていると思うのですが、前回の市史を監修されたのが、有名な一橋大学名誉教授の増田四郎先生です。増田先生がお書きになったものを、昔、

一生懸命読んだことがあるのですけれども、先生は地域史について、学問的批判に十分応え得るものを作りなさい、これが地域史の特性だとおっしゃっています。

増田先生はドイツ中世史が専門ですが、日本の地域史について注目された論文を書いているのです。それは『一橋論叢』という、先生が教鞭を執られていた大学の雑誌に掲載されておりまして、「地域史研究の効用と限界」という論文です。なぜその増田先生が関係されたのかと思っていましたら、国分寺市民だったのが一つです。それからもう一点は当時の塩谷市長と増田先生、思想的に相入っていたのです。そういうことがあって、恐らく増田先生のところに行つたのだらうと思います。

なぜそういうことを私が申し上げるかといいますと、私は、前回の市史編さんで、私がお手伝いしたのは事業期間の後半なのです。それはどういうことかといいますと、市史の編集委員に市が任命した方々のうち、文化財保護審議会の委員が半分以上入っています、そのうちの一名がお年でお亡くなりになり、その欠員として私が就任しました。当時、私は遺跡の発掘調査ばかりやっていたのですが、文化財の方も手伝えと言われ、審議会に

入ったのです。文化財保護審議会委員だから、市史も手伝えということになりました。

その中で市史をやる場合、満遍なく項目を立てて作っていけるかどうかという問題がありました。前の国分寺史に私も原稿を書いたのですが、これは国分寺の遺跡そのものについて書いていないのです。瓦を焼いた場所を検討するというのが私に課せられた仕事でした。これは武蔵国全体を踏まえて書いたものですから、ある程度今でも使える内容になっていると思うのですが、それは国分寺市のことではなかったのです。というのは、当初の論議が十分なされた上での分担執筆ではなかったのです。これは監修者の増田先生のご意見もあつたかと思いますが、やはり市の事務局が積極的に自分たちの歴史を作るのだという意欲を委員会にも反映してもらわなければ困るのです。そこをひとつ頑張っていたことが重要ではないかという気がします。

増田先生は監修の言葉を書いておられますが、これは皆さんの意見を総合しながら、まとめてくださった文章ではないかと思えます。そこに当時の時代の動向というものが反映されています。ドイツ中世史の権威におい

て日本で第一人者、世界的にも有名な先生。その先生が市民で、代表で、市長さんとの間に入ったものですから、非常に強い力がおありになった。

ところが市長さんが一年ぐらいでお替わりになりました。そうしたら、次の本多市長は地元出身なものですから、地元を中心にしなくてはいけないということをおっしゃったのを記憶しています。私がお手伝いに入ってきた文化財保護審議会をやっていたものですから地域を大事にしようと、武蔵国分寺を大事にしてくれよ、とおっしゃったのを記憶しています。

そういう中で私が感じましたのは、増田先生のおっしゃたような悉皆調査というものは、非常に重要だなということを改めて感じました。考古学の場合ですと、モノは具体性を持っていきますから、悉皆調査しやすいのです。市内を満遍なく歩きまして、十分調査すればいいというので、発掘を伴わない前の段階では楽だったのです。

ところがそういうものを調べてみますと、国分寺市は日本で有名な場所です。今はこの教科書にも出てまいりますが、旧石器時代から日本は始まると書いてあるのです。群馬県の岩宿という遺跡です。しかし、本来は国

分寺市で見つかったのが最初です。ですから国分寺市の地名のついた文化になるべきだった。熊ノ郷で出土したものですから、最初の発見地の熊ノ郷式文化という名前にすれば面白かったなと思うのです。

そのようなことを先駆的にやったのが、当時国分寺の住職だった星野亮勝先生です。後に市長になられました。熊ノ郷遺跡の発見の公表が岩宿遺跡より一年遅れたために群馬県の方の遺跡名が有名になってしまったのです。星野先生は地域を非常に細かく歩いて調査をしたわけです。その調査をした一つが、先ほど教育長さんがおっしゃった、今回の多喜窪遺跡なのです。その報告書が、私もうっかりしていました、前の国分寺市史を作るとき先ほどの理由で、私は全体を見ていなかったのです。その部分を書いた方はよく知っている先生です。後でそれを見まして、これはまずいなど思ったのです。

多喜窪遺跡は有名な、国指定重要文化財にもなっている土器の出土地です。本来、発掘調査は文化財保護法によつて届出をして発掘をしなくてはいけないのですが、この土器を発見した発掘では、届出をおやりにならない頃だったので。まだ文化財保護法が発布されて間もない頃

で、ご存じなかったのもしれません。その調査のなかで、あの大きな有名な重要文化財の土器を発掘されたわけです。

そういうことに全く触れないで作ったものが前回の市史なのです。それはもちろん公にできないこともありますけれども、市としては市の歴史というものは正しく書いておかなくてはいけないということで、書いていいことと悪いことを識別しながら、やはり残すべきだろうと。資料として残すべきものはちゃんと記録として残さなくてはいけないと思いました。

このたび、報告書を作る際に改めて調べて、を書いたわけです。もう時効になっているのでいいと思うのですが、そのようなことが実はあったのです。そういうことを考えますと、付近の遺跡を都立国立高等学校が掘ったのですが、調査した時の資料が、その高等学校にあるかどうか分かりません。調べ足らないということでした。だからそういう点を考えますと、国分寺市の遺跡から出たものは国分寺市で保管すべきだ。そこで責任を持って郷土の資料にすべきだろうと思います。遺跡の基本台帳を作るのは、今度の新しい市史のやり方だろうと思うの

です。そういうことも考えなくてはいけないのではないかと思います。

それからもう一点、仮に私が責任者として国分寺市史を作るならば、原始・古代から始めません。現代からやります。まず現代がどうだったということを最初の巻で



和やかな雰囲気の中で進むトークセッション

押さえます。それから今度は近代・近世、一番最初の古代・原始というものは最後の巻に持つてくると、私ならするでしょう。倒置法というのですが、私が以前書いたある本はそのように書いたのです。そうしたら、案外評判がよかったです。やはり現代から遡っていく方がいいねという人もいました。考古学でそんなことを言う人はあまりいないのですが、私はそれが一番皆さんに理解していただけるだろうと思つたわけです。というのは遺跡を掘りますと、上の層は現代です。だんだん古くなつていき、一番下は古代・原始です。それを歴史の順番に並べていくならば、何で下から行くのだと、やはり上から行くべきだろう。そのように考えたわけです。そういうことを言いますと、そんなことは行政ではできないよとおっしゃる人が多いのですが、そういう新しい考え方というものを地域の人の立場に立つて考えるならば、やはり編み出していくことも必要ではないかなと思えます。

市長　私も同感です。そうしましょうか、今回。でも、やはりそう思うのです。市民の方に読んでいただくのだつたら、やはりそこからではないかな。

坂詰　でも前の国分寺市史を拝見しますと、近世を扱っている中巻はすばらしいです。非常にいい点は、地元の方を動員して悉皆調査をした成果なのです。ですから、今まで知らなかったこともどんどん分かってきました。恐らく、多摩地域の自治体史で近世史がうまくまとめられている国分寺市史が圧巻だと思います。あれだけのものはなかなかできないのではないかと。ただ欠陥もあるのです。私の友人が担当したので言うのですが、彼もやっぱり自分の意識に沿つて編集していたのです。やはりトップの人が一人でやつては駄目なのです。周りの人の意見を作つていかななくてはならないと思います。

ただ近世については、もうすばらしいものだとこのことは言えると思います。ですから、まさに今度近世をどのように切るのか、後でお話が出ると思いますが、教育長さんがおっしゃつた「国分寺学」をやるためには非常に重要な材料がいっぱい入っています。ですから、ぜひそういう点で新しい視点をやっていただければと思います。過去の資料でも一部誤りがあったというお話がありましたけれども、立派なところもあるということです。

市長　ありがとうございます。

4. 「国分寺学」と新たな国分寺市史

市長 今、「国分寺学」のお話を坂詰先生からいただきました。国分寺の市民、そして子どもたちが理解でき、そんな進め方をしていきたいなと思っています。そういう意味で子どもたちの参加というものも非常に重要かなと思っています。また、第三次教育ビジョン策定にあたっては、令和五年度に小中学生にアンケートを取りました。それから、一〇〇歳とは言いませんけれども、

九〇代、八〇代のお元気な方もおられますので、そういう方々から生の声を聞き取っていただきたい。裏話みたいなものがあるかもしれませんし、語れない部分もあるかもしれませんけれども、悉皆調査というものはまさにそうではないかな。やはり今あるものをきちんと調べ上げていくということが必要かなと思っています。

ちょっと話は飛ぶかもしれませんが、これから「第二次国分寺市総合ビジョン」という、市の総合計画の策定に向けて現在作業しております。その中で、これからの八年間を、「教育ビジョン」ともすり合わせた上で進めていきたいと思っておりますが、その中に市史を

ぜひ取り入れていきたいと思っています。

広く市民と一緒にやって、できれば協働して進めていきたいと思っていますので、専門員・調査員の方のご協力をお願いできればと思います。四月一五日号の市報で市史編さん市民協力を募集いたします。国分寺市に非常に興味を持っておられる方がたくさんおられますし、国分寺に長く住んでおられて、ずっと先祖からの歴史もご存じの方もおられますので、そういう方を巻き込んで進めてまいりたいと思っています。

先ほど申し上げたアンケートの結果でありますけれども、また後で教育長から補足していただければと思いますが、その中で幾つか設問を投げかけています。「あなたは、あなたが住んでいる地域で昔どのような出来事があったのか知りたいと思いますか」とか、「あなたは私たちの親や先祖が、昔、どのような暮らしをしていたか興味がありますか」、その二項目を設定し、子どもたちの歴史に対する関心度を確認したところ、多くの子どもたちが関心を寄せていることも明らかとなっております。特に子どもたちには国分寺市という地域に愛着を抱いていただけるよう、今回この「国分寺学」というものを「地



「国分寺学」の取り組みを紹介する
井澤市長(中央)と古屋教育長(左)

域に親しみ、地域に学び、地域を考え、地域に貢献する」という理念に基づいて、学習を進めていきたいと、このように思っております。

教育長から、この辺についてちょっと一言付け加えていただけますか。

教育長 ありがとうございます。これまでお話いただいたように、市民との協働というところが、この市史編

さんの大きな特色にもなるかなと思っております。史跡指定一〇〇周年を契機として、坂詰先生にもご講演いただきましたけれども、多くの著名な先方のご講演や研修会等も開催させていただきました。これらにはたくさんの方、また都外からもお越しいただくような状況で、国分寺について多くの方が関心を寄せられているな、魅力を感じていらっしやるなと思ったところでございます。ぜひ協働作業を進めていきたいと思っております。また、やはりこの国分寺の貴重な歴史・文化を守っていくのは子どもたちです。ですので、子どもたちにもこの市史編さんについても何らかの形で関わってほしいという願いを、私も持っているところでございます。

そんな意味もあって、アンケート調査の結果も、本当に子どもたちは国分寺のことを知りたい、もっと学びたいという意欲もたくさん持っていますので、今年度から公立小中学校全校で「国分寺学」というものを実施することといたしました。ここに「国分寺学」のリーフレットも配らせていただいているところでございますけれども、教科横断型、様々な教科、社会科ですとか、総合的な学習の時間ですとか、特別活動とか、様々な場面で学

んでいくと。それを総合して「国分寺学」という名称に位置づけているところでございます。

国分寺市全体を学びのフィールドとしながら、また教材としながら、子どもたちが探究的に学んでいくというものであります。当然歴史や文化、自然について学んで、そのほか様々な人材から学ぶこともございます。そういう学びを通して、きつと子どもたちはこの国分寺のすばらしさ、よさを感じ取りながら、また自分自身のアイデンティティのよりどころとなるような、根幹となるような郷土への愛着とか、愛情といったものを持つようになっていくのかなと思っております。

さらに、探究的な学習ですので、こういう課題解決力、コミュニケーション能力、また社会参画力といった様々な、これから子どもたちが未来を作るために必要な力も育てていきたいと思っております。

そんな子どもたちですので、ぜひこの市史編さんで、中間地点でも結構ですので、何か成果物があれば、それを教材として学ばせていただきたいと思えます。また、今、小学校三・四年生の社会科では『わたしたちの国分寺』という副読本を使っています。これも、これから更新を

してまいりますので、その中で市史編さんの成果を生かせればなと思っております。

さらに、「子ども市史」といったものも作れたらいいなど、そんな夢というか願いを持っているとござりますので、ぜひ子どもたちにもこの市史編さんに関わってほしい、それから市史編さんの成果を生かして学びを深めてほしい、そんな願いを持っております。ぜひ皆様方にご理解とご協力をお願いしたいと思います。

司会 ありがとうございます。昨年「新たな国分寺市史編さん基本方針」を先生方にご審議いただくなかで、いろいろとご意見をいただきました。坂詰先生、「国分寺学」の取り組みについて、どのようなご感想を抱かれましたか。

坂詰 私も「国分寺学」の構想を見させていただきました。私は国分寺市の歴史を知る場合に、子どもたちと一緒に話した場合にやはり一番いいのは、歩いて、見て、考えると、この三つだと思っております。自分たちの郷土を考える場合には、まず第一に歩かなくてはいけない。それから、二番目にはよく見て、観察していかなくてはならない。そして、その結果を考えていかななくてはな

らない。これが非常に重要なのです。

この「国分寺学」で、「地域に学び、地域を考え、地域に貢献する」と書いてありますが、まさにそのとおりだと思います。ぜひ市史の編さんを通して地域を学んでいただきたい。そのためにはまず学校教員の皆さんにも学んでいただかないとならないのではないかとという気がいたします。できれば教員の皆さんに対して、教育長さんが「国分寺学」というものは市史を作る場合の基本精神なのだよと。みんなに対する教育をする場合の基本なのだよということを啓発していただければいいと。子どもたちにはそういう先生方を通して、啓蒙していただくということだと思います。

先ほど私は、歩いて、見て、考えるといいとお話ししましたが、国分寺の近世を考えた場合に、子どもたちにも身近な問題を提起してあげたらどうだろうか。例えば、私が以前から考えていることなのですが、国分寺に二人、江戸時代の文化人としては、これに勝る人がいないという有名な人がいます。その一人が、宝雪庵可尊ほうせつあんかそんという俳句の名人です。可尊は江戸でも有名な人でした。この方が大政奉還後に国分寺に戻ってきて、大変多くの弟子を養

成されています。この方の歴史をぜひ、歩く、見る、考えるの中でやっていただいたらどうだろうか。お墓も残っています。顕彰碑もあります。そういうところを見ていただくということも重要だろうと思います。

それから、もう一人は本多すけけん雖軒です。国分寺に資料がたくさんあります。おたかの道湧水園、あそこの長屋門に行っていたかと分かりますが、この方はお医者さんでありながら、国分寺学校の教師でした。こういう方がたを大いに活用してというのは申し訳ないですが、二人の国分寺の文化人を通して、近世の国分寺市を知っていただくということも一つ方法ではないでしょうか。

中世の場合は、この前の市史ではあまり取り扱わなかったのですが、市内には鎌倉街道が通っていました。鎌倉街道があるために武蔵国分寺の伽藍も焼けたという説もあるほどです。以前、発掘調査したことがあり、それで道路の幅が古代の東山道武蔵路とは異なることが分かりました。そういうものは子どもたちを連れていけば実際にここなのだよと。なぜ鎌倉街道がここに作られたのか、なぜ古代の道路の東山道武蔵路があったのかという説明もできるわけです。古代の東山道武蔵路という遺構

地域に親しみ、地域に学び、
地域を考え、地域に貢献する

国分寺学

～人と学びが循環するまちを目指して～



国分寺学とは

次代の国分寺市を担う子どもたちが、市民の方々の地域に対する思いを受け止め、主体的に地域と関わり、地域に根差した探究的な学習を進めることにより、「課題解決力」「コミュニケーション力・協働力」「社会参画力」に関する資質・能力を育むことを目指しています。

令和6年4月
国分寺市教育委員会

市が取り組む「国分寺学」の
リーフレット

も、よく残っていたと思うのです。これなどは大いに鎌倉街道の関係で教材になるのではないかと思います。そのようなことは幾らでも出てくると思うのです。殿ヶ谷庭園へ多くの方が来られます。ところがなぜ殿ヶ谷庭園があそこにあるのかという理解はあまりないのです。ですから、殿ヶ谷庭園を含めて国分寺市は大正年間に別荘地として大変発達した。その意味づけを皆さんはほとんど知らないのです。それを周知して頂くのも市史の一つの大きな眼目になるのではないかと気がいたします。

この前、国分寺の遺跡で、何人かを連れている学校の先生がおられました。府中はいいですね、いい古墳がありますからと言うのです。いい古墳とは何だと思いましたが、武蔵府中熊野神社古墳。実際、私が調査したものですから、いい古墳ですよと話をしたのですが、その先生は、国分寺には何もないと言うから、とんでもないと言ったのです。国分寺の古墳は、あまり知られていないかもしれないけど、内藤新田横穴墓という古墳があるのです。これはもう関東に冠たる横穴墓で、七世紀後半、ちょうど熊野神社古墳とほぼ同じ時期に、大変位の高い人が内藤にいたということを示す材料なのです。

ところが今、横穴墓はないので、皆さんは見る事ができません。その調査報告書は都立国立高等学校がまとめたレポートでしか残っていないです。だから、そういう資料も今度の市史で探していただいて、国分寺市でも古墳時代の文化があったのですよと紹介していただきたい。別に府中市と競争する必要はないです。府中・国分寺は一体であると私は考えておりますから。

その地域を考える場合に、具体的な知識がないとあやふやな理解になってしまいます。そんな例を幾つか挙げ

て見ていただくと、それはまさに教育長さんのおっしゃる「国分寺学」の考えだと思っております。

ですから、まず学校の先生方にこれを学んでいただき、子どもに伝達してもらおう。これが郷土愛を育む一つの資料になると同時に、先生方の力を今回の国分寺市史に役立てていただきたい。国分寺市の場合には教育長さんのお力で、先生方の意見を反映する市史を作っていたければありがたいなと思っております。やはり地域を大事にする場合には、地域の人の意見というものは大事だと市長さんがおっしゃったように、市の子どもたちを中心にした、それこそ「子ども市史」というものができればすばらしいと思います。ぜひそういう冊子も作っていただけるとありがたいと思います。

私は府中市などに行つてよく言うのですけれども、府中市内は第二次世界大戦のときの飛行機の掩体壕えんたいこうが残っています。そうするとそこを起点にして戦跡せんせきということが問題になりまして、おじいさん、おばあさんが知っている身近な歴史が語られることがあります。国分寺もきつと探せば各所に戦争の痕跡はあると思いますので、ぜひ身近なことをテーマにして、市史づくりのきっかけに

していただくことも重要ではないかなと思います。

市長 ありがとうございます。今、坂詰先生からお話がありましたけれども、子どもたちは本当にとても敏感です。話は飛ぶかもしれませんが、今、新しい庁舎を建てており、庁舎の外観は「木漏れ日グリーン」をカラーコンセプトとしています。これは、子どもたちが市内を巡つて、国分寺の色を考えて、みんなで決定しました。大人ですと「木漏れ日グリーン」という発想は出てきませんよね。ですから、大人にはない感性を子どもたちは持っていると思います。「国分寺学」や市史編さんを通じて子どもたちの豊かな感性が育つてほしいです。

そのようなところで、「国分寺学」ができました。また、「国分寺学派」というものを、今、東京経済大学で学長さんが非常に熱心にやられていますけれども、羽貝先生ご自身も東京経済大学に一〇年以上お勤めですね。

羽貝 二〇一一年四月からですので一三年勤めています。その前から非常勤などでお世話になったので、もう一五年以上が経つのですけれども、とてもいい場所だなと思つて、いつも毎日通っています。

5. 各部会の課題

市長 それでは、ここからは各部会の課題を皆様にお聞きしたいと思います。まず、羽貝先生、現代市制部会についてお願いします。

羽貝 先ほどやややフライング気味で子どもたちに、という話を申し上げましたけれども、一連の話がありますので、少しだけ補足します。

増田四郎先生のお話もあつて、確かにご本人は中世ドイツ都市のご専門で、そこから地域とは何かというご本をお書きになって、僕も勉強させてもらいました。結局、都市自治体の自立度をいかに高めるかというのが増田先生の最大の関心なのです。本学（東京経済大学）の理事長だったこともありまして、いろいろな意味で学ばせてもらつてはいますけれども、都市自治体の自立度、結局は市民自治度といえますか、自治意識の問題です。その中で、繰り返し主張されるのはやはり意識改革ということをおっしゃるのです。市民自治の観点からいうと、当時から逆照射したときの日本の都市自治体はどういう状態なのだろうかということを論じられました。

繰り返し意識改革とおっしゃるのは、それだけ難しいということなのですが、しかしそれはある意味で、どこでそれができるか、どうやってやるのだというのが次のものすごく大きい問題ですよ。結局それは、それこそ子どもの頃から少しずつ、やはりいろいろな機会を通して学んでいくことだと思えます。学ぶ手がかりが、おっしゃるとおり歴史なのだと思うのです。

坂詰先生が強調されているとおり、そうならばその歴史は、市史は正確を期したものでなければならぬ。増田先生の言葉でいえば、まさに学問に耐えられるもの。これだけやはりきっちり正確を期して本を編集すると事実上の、一種の学術書だと思ふのです。しかし読みやすく、どなたにとつても手に取つて、なるほどと思えるものに、そんなふうイメージしているのですが、歴史を知ることが大事だというならば、なおさら正確な記述が必要だと、おっしゃるとおりだと思います。

そのときに、先ほどご指摘がありました、歩いて、見て、考えるという、このことですよ。これも本当におっしゃるとおりだと思つてお聞きしました。僕の専門分野で、「歴史は人につくというよりも場所につく」とい



現代市制部会の展望を語る羽貝氏

う言い方があるのです。武蔵国分寺跡が最たるもの、象徴だと思えます。もちろん歴史は人が作るものであります。しかし「歴史は人につくというよりは場所につく」と。その場所がずつと残る。それで、そういう観点からすると、そこを歩いてみれば、立ってみれば、周りを

てみれば、何事かを感じることがあると。そういう観点で今のご指摘は本当に大事だと思えました。

それを踏まえながら、現代市制部会の話でいえば、先ほどのように、まさに現代史を扱うという分野になるので、本当にいろいろな準備を重ねながら、多くの方々のお知恵を拝借しながら、根拠のある記述をしなくてはならないと思っています。

その根拠のある記述をするときに、市史編さん室の皆さんに過去の市報の見出しを集めた資料をいただいて、既に読ませてもらったのですけれども、本当に様々な出来事があったのだなと思います。過去を振り返ってみても、やはりポイントになる節目といたのですか、六〇年代、七〇年代、それから八〇年代になってから、九〇年代以降みたいな形で、ここは大きい節目としての取組なのだなというものが分かる、そういう出来事はいっぱいあるのです。

「新たな国分寺市史編さん基本方針」では、市民との協働がうたわれています。パートナーシップ、二〇年前ぐらいから「協力して働く」協働という言葉が大分浸透してまいりましたが、本市の場合は協働などという言葉

が使われる相当前から、実質的に市民、民間事業者、それから行政の方々、かつ、また大学等々、広く関係主体と本当に一緒にやっているということが分かるのです。

地区防災、地域防災につながる取組なども最たるもので、それも非常に大きい試みだと思います。それをベースにこれをルール化するという、またある種のルールとして共通の認識であるものにしよと書かれたものが、僕は「国分寺市自治基本条例」だと思っています。それから自治基本条例に書かれていることは、文字どおりそれまでの間に本市がやってきたこと、それが前提になっっているなと思っはいるのです。

先ほど住民が市民になるなんて生意気なことを申し上げました。市民の捉え方も様々ありますけど、市民と言ったときに、いわゆる本当に住民票を持つ方々のみならず、在勤・在学、ここで活動する方々、様々な方々が入るのですよというふうになっていきます。これなど、二〇〇八年に制定され、十数年がたちますけれども、非常に大きな道しるべであるし、それまでの取組を前提にして、その先を見た、そういう条例なのだろうなと位置づけております。

いずれにしても、現代市制部会は本当に大きな節目を、やはりここということころをきっちりみんな話合って決めながら、その上でこれがどういう働きを持っていたかという辺りもきちんと議論していきたいなと思っています。過去を振り返りながら、今を思い、かつ未来につながる視点というのですか、そういうものをはっきり打ち出していきたいと思っるところです。

市長 ありがとうございます。続きまして近世・近現代部会の西木先生お願いします。先生とは、J・COMの「長つと散歩」という番組で、何度か共演させていただきました。そして、東京都公文書館にも訪問させていただきました。令和四年に国分寺市教育委員会と共催しました企画展「史料に見る国分寺のあゆみ」江戸時代の村々」は大変良い展示でした。改めて国分寺市内にあった江戸時代の一〇か村の成り立ちなども、市にはない資料を公文書館でたくさんお持ちということで、貴重な資料を見学させていただきました。ぜひ新しい市史でも、そういった資料を活用していただければと思っっているのですけど、いかがでしょうか。

西木 そうですね。まず、ちょっと個人的にことをお

話しさせていただくと、私はもともと小学校の教員を
指して、東京学芸大学に一九七九年に入りまして、そ
で近世史の竹内誠先生に出会って、歴史研究の道を歩
くことになりました。学生時代に国分寺は自転車に乗
って、ジャージを履いて、しょっちゅう来ていたところ
ですし、授業をさぼって殿ヶ谷戸庭園でぶらぶらして
いたので、いろいろと思い出の残っているところです。

数年前に世田谷からこちらへ職場が移ってきました
が、本当に新しくきれいになっていて国分寺駅周辺の
変わりようにすごく衝撃を受けました。かといって職
場の周辺や市内をちよつと散策しますと、私の学生時
代と変わらない町並みとか、武蔵野の面影が十分に
残る光景があります。そういう新しい利便性のある、
活気のあるまちという側面と、歴史的な魅力を重
ね備えているというのが国分寺の魅力なのかなと思
っております。

実は三月に一度事務局からご依頼をいただいて
歴史に関する講演を予定していました。ちよつと私の
不注意でけがをしてしまったもので、延期となり、
ご迷惑をかけたしまったのですけれども、そこで
お話をできたらと思つて、一月頃にいろいろと先
進的な自治体史の、特に市

民が参加するところの自治体史編さんの話を聞き
に大阪の方で研究会に参加しました。

大体市民参加がうまくいっている自治体の多
くの事例を聞くと、やはり新しい住民がその地域
に関心を持って積極的に関わっている。もちろ
ん古文書とかをお持ちなのは、古くからここ
に住まわれている方々なのでしょけれど、新
住民という、国分寺の場合も新たな子育て
世代とかがどんどん入ってこられていて、や
はりそういう方がこの地域に関心を持って
いく、そういう契機にこの編さん事業がな
つていったらいいかなと思います。

つまり国分寺がふるさとである人と、国分
寺をふるさとにしていく人と、それがうまく融
合するためにいろいろな取組が、市史編さん
事業期間中にできたら面白いかなと思つて
おります。

近世史の話の前に、今、配つていただい
たのですが、東京都公文書館で「国分寺一九
六四」というミニ企画展をやつておりまし
て、まさに市制が施行された一九六四年の
写真と、それから現代の写真、これを六四
年の住宅地図というものはまだないです。
この何年か後の住宅地図があつて、それ
を見比べながら、うちの職員



「国分寺一九六四」を紹介する西木氏

がずっと歩いて、この写真はこの場所だということを示しながら、現在の写真と並べて展示をしています。こんなものをもう少し大々的に、市民からも写真とかを提供していただいで、やったら面白いかなと思うのです。今の小学生や中学生にとっては一九六四年のまちの姿はとてつもない異文化に映ると思います。舗装されていない道路がある風景などは知らないかもしれません。

一方で、この頃、小学生だった方は、まだ七〇歳ぐらい、お元気で記憶も確かです。いらっしやるから、一九六四年の遊び場マップ、どこで遊んでいて、何をやっていたのかみたいな話というものが切り口になっていくのでは

ないかなど。その辺、一九六四年、六〇年前というものは、やはりそこからの変化というものはとてつもないスピードで変化しているので、ひとつ面白いのではないかなと思います。

それから、近世と近現代については、先ほど坂詰先生からもお話がありましたように、十分に使える旧市史があるので、今回新しいシリーズが出たらお蔵入りになるのではなくて、並べて使っていただきたい内容になっています。ただ前回は残念ながら論述の根拠となる資料集ができていません。かなり膨大な資料目録はきちんと作られているのですけれども、それを生かした資料集がないのと、やはり目録に掲載されている資料が、現状、どこでどう保管されているのかというところがちょっと危なっかしい部分があるのです。その見直しがまず大事になってくるかなと思います。

私も公文書館に勤めておりますので、やはりその地域の歴史、資料自体がとても重要です。最終的にそのごく一部を使って刊行物ができるわけですけれども、やはりその地域資料自体を大切にしていくことを、この一〇年の中で意識していきたいなと思っています。

そういった意味では、先ほどから話の出ている武蔵国分寺という史跡を、ボランティアガイドの皆さんがたくさんおられたり、地域の中で守っていく、語り継いでいく、保存していくという取組を国分寺市は経験しているのです。これは強みだと思えます。ただ、言ってみれば、そういう地域の中の景観とか史跡とか古文書といった地域歴史資料というものを、この武蔵国分寺のよりに守ろうとする市民の結びつきが、それを一体として地域歴史遺産と呼べるかと思えます。この地域歴史遺産を武蔵国分寺跡だけではなくて、歴史資料や歴史的な景観を含めて市民の皆さんとともに確認していくというのが、これからの市史編さんの事業の大切なことかなと思っております。

ですから、我々は当然成果物に責任を持たなくてははいけません、そのプロセスでできる学びの場みたいな、そういうものができてこそ小学生や中学生にも伝わっていく基礎ができていくのかなと思えます。責任は重いですが、とても楽しみでもあるのだと思っております。

市長 ありがとうございます。荒井先生は、現在藤沢市にお勤めされながら、明治大学・駒澤大学で古代史の

ご教鞭を取られていらっしゃいますけれども、国分寺市にはどんなイメージをお持ちでしょうか。武蔵国分寺のことをご研究されていらっしゃいますね。

荒井 まず史跡という空間があるというのは一つ大きなポイントだと思います。市民共通の、ある意味憩いの場であつてもいいわけですし、学習の場であつてもいいわけですし、いろいろなことが展開できる場があるというのは、国分寺市の一つ大きな強みだと思います。

それともう一つ、国分寺という自治体の名称ですね。ちよつと前までは栃木県と佐賀県にもあつたのですけれども、今、全国的に国分寺という名前を持っている自治体はここだけです。これはもう売りに使うしかないと思うのですよね。市史編さんでも、国分寺の資料、古代の資料は悉皆調査というよりも、ある程度はすでに明らかになつている資料があります。それをどこまで追及するのかという課題もございますが、せつかく国分寺という名前を冠している市町村はここだけなので、国分寺のことに關しては国分寺市史をみると参考になるというように、それぐらいの構想は少し考えてもいいのではないかと思っております。

先ほど坂詰先生からお話がございましたように、国分寺市と府中市は、今の自治体としては分かれてしまっています。ただ昔は一緒に、その中でも行政が府中で、こちらは文化というイメージがあります。そうしたことをうまく府中と、つかず離れずというか、どう差別化するというところもあるんですけど、そんな形でやっていければ独自色がでるのかなと思っています。

国分寺というネーミングは古代なので、古代史的な国分寺、聖武天皇とか天平文化といったものが出てきてしまっているのでしょうけれども、その後もずっと続いていて、今でも国分寺というお寺さんがあるわけですよ。そうした点で、国分寺市史の歴史を貫く一つの軸として、国分寺というものを取り上げていきたい。それがまさに国分寺市の歴史なのではないだろうか、そのように思っています。

ですから古代はどこまでやるか、中世・近世の中で全国的にどこまで広がっていくか、そんなこともほかの部会長さんと相談していければいいのかなと思います。

司会 令和五年にたましん地域文化財団・東京都市町村自治調査会が共催で第二六回「多摩の歴史講座―多摩

の古代文化」という連続講座を開催しました。荒井先生は多摩地域の古代史で、今、非常にホットな話題の人物を取り上げ、「深大寺の白鳳仏はくほうぶつと渡来人高麗福信とらいじんこまのふくしん」と題するご講演をされました。会場には、市民の方もたくさん足を運ばれていました。

古代史の分野では、こういった渡来人の研究も大分進んでいるようですが、前回の市史では、あまりクローズアップされていなかった印象がありますね。

荒井 渡来人高麗福信といわれますが、武蔵国の生まれの渡来三世なのです。そこはちよつと用語の問題として難しいところもありますが、この人は武蔵の国守こくしゅ、今で言えば東京都知事兼埼玉県知事を三回務めているという、奈良時代のこの地域の、政治的にも文化的にも非常に重要な人物です。深大寺の白鳳仏が国宝になりましたが、あの仏像を都みやこのほうから持ってきたのも、背景には高麗福信がいるのではないだろうかというのが最近の学説なのです。

そうした意味では、高麗福信はとても注目すべき人物です。武蔵国分寺の造営がなかなか進みませんでした、福信が国守を務めているときに、テコ入れて国分寺の



古代史研究の進展を語る荒井氏

造営が進んだのだろうと考えられています。この福信という人物は、今回の新しい市史の中では大きく取り上げる必要があると思っています。

あと、冒頭にお話がありましたように、前回の市史の上巻が刊行されたのは昭和六一年ですから、それから

四〇年近く経っています。四〇年というのはかなり長い時間差がありますので、考古学の成果でも、この間、東山道武蔵路の発見がありました。

それから、国分寺に二つめの塔跡がみつかりました。この二つの発見は前の市史には入っていない情報なので、難しい問題は残っているのですけれども、これを市民の方にもわかりやすく紹介する。

それと、先ほどの先生方のお話を聞いて思いましたのが、この東山道武蔵路に関しましては現代的行政課題として保存運動がありまして、その結果として遺跡が残ったという経緯もありますから、それは現代史で扱うのか、古代史で扱うのか、いろいろ調整すべき課題はありますが、やはり市にとって大事な歴史ですので取り上げるべきだろうと思います。

もちろん、それと同時に、武蔵国分寺が大正十一年（一九二二）に国の史跡に指定された後、どう保存されて今日に至っているのかということも、武蔵国分寺が決して古代的な問題ではなくて、現代的な問題、あるいは未来につながる問題として押さえていく必要があるのだらうと。そういった点でもいろいろところで、専門部

会の縦割り、横割りではなくて、クロスしながら市史がうまく編んでいければいいのかなと、そんなことを思いました。

6. 全体総括

市長 ありがとうございます。今、部会長の先生のお話を聞いただけでも、新しい視点での市史ができそうだなという気がいたしました。

私は全国史跡整備市町村協議会の会長を五年務めていたのですけれども、その折に全国の国分寺を幾つか回りました。現存する建物はなく、所在不明な国分寺もあるので、武蔵国分寺のように遺跡が残っているというのは非常に価値が大きいのかなと。幾つかの首長さんから「全国国分寺サミット」をまたやろうよというお話を頂いているのですが、ちよつと途切れておりまして、ぜひまた復活させていきたいなと思っています。

これだけの国の財産を私どもは管理しているので、しっかりとこれからも、市史はもちろんでありますけれども、歴史を引き継いでいく、そういう役割が必要だと

また責務だと思つているところでございます。

最後に坂詰先生から、一言お願いできますでしょうか。坂詰 各部会長の方々からお話をうかがいますと、非常にユニークな市史ができるのではないかなと思えます。ぜひ他の市と同じようなものではなく、新しい切り口の市史を作つていただきたいと思えます。特に国分寺が市制を施行して以降、羽貝先生のところは大変だと思ふのですけれども、資料集をしっかりと出して、その資料集を基に国分寺市としては文書館もんじょかんをぜひ作つて、保存体制を確立していただきたいなと思えます。

もう一点、郷土史でございますから、やはり資料は正確な資料を残すということが重要ではないかと思えます。国分寺市に関係ある資料を、どうにかして正確に將來へ伝えていく方法をぜひ市としてとつていただきたい。また市史で集めた資料をどのように今後活用していくかという先の見通しをつけていただきたい。普通、市町村史ができるのと、集めた資料をそのあとどうするかということについてはなかなか難しいのです。図書館に入れてしまえばいいといった意見もありますが、ぜひ国分寺市の場合はどういうことをやったらいいのか検討して

いただきたいと思っております。

目下、府中市では市制施行七〇年を迎え、ぜひ文書館を作つて欲しいとお願ひしているところです。やはり博物館、図書館、文書館、また美術館もありますけれども、市の皆様のご協力をいただいて、市史が一過性に終わらないような、先々に結びつく内容をやっていただきたいと思ひます。

それから、お願ひしたいのは、「市史だより（ニューズ・レター）」を作成することが必要と思ひます。市史編さんほどのようなことをやっているのかを広く知つていただくことも重要です。私が伊東市史を引き受けた際には、「伊東市史だより」を市内全戸に配布することを提案しました。そうしましたら、年に一回ないし二回ですが、市長さんの英断で全戸配布が決まりました。他の市ではやっている例がありませんのではないかと思ひます。そういうことを市史が終わるまでやってもらいました。こういうことも市民の人の協力を得るために重要ではないかと思ひます。

また、「市史研究」という冊子を出す予定だそうですが、その場合にはあまり専門的な論文ばかりを載

せても意味がないのです。専門的な論文はそれぞれの所属の学会の雑誌に出せばいいのです。何も市史に出す必要はないと思ひますので、市史研究は市史に即した分かりやすい内容の、啓蒙的な内容も含めるといいと思ひます。特に講演会の内容はそっくり載せてもらいたい。そうすると、聞きに来られなかった市民の方も「市史研究」を読むことによつて、どういう講演が行われたかを理解できる。

そういう点で市史研究の役割というものも、また大きくなつていくのではないかと思ひます。私は各地でかなり強引に主張してきましたが、案外住民の人にとっては評判よかったです。

先ほど市長さんもお話しになりましたけれども、市史は飾つておくだけでは意味がないのです。作成する途中で、市民の人、そして子どもたちに分かる写真を中心としたもの、技術が今、発達しておりますから、中間的なものでいいと思ひるので、図録の市史もぜひ作つていただきたい。終了したときに、その改訂版を出せばいいわけですから、そんなことも考慮に入れていただいて、市史の活用をやつていただければいいと思ひます。

それから、先ほど新市民のお話が出ましたね。よく私も府中市で話しているのですが、市に転入をした新しい方には、その市が分かるパンフレットを渡す。極端なことを言えば、市史の概要版でいいから、それを配ってもらいたい。それで自分の入ってくる市がどういう歴史であつたのか、どういう成り立ちであるのかということを理解していただくために、現在の市の行政と同時に歴史が分かるパンフレットを作ってはどうかと思っております。できれば市史でそういう編さんもやっていただいて、市の行政の窓口の対応をやる。市史は決して孤立してないのだと、市役所全体の広報マンとしての役割を果たしていくことをしめさんと、単なる市史作成では意味がないと思うのです。ぜひそういうものをお願いしたいなと思っております。

幾つか勝手なことを申し上げましたけれども、最終的には市長さんと教育長さんの腕次第。お二人が市史作成にあたり叱咤激励して下されば、いい市史ができると思っています。

しかし、いざ始めてみると、期日どおりに原稿が揃わないこともあります。ですから執筆者は非常に人選が難

しい。下手をしますと、高度な内容の学術論文集みたいな市史ができます。それでは意味がないと思います。それはぜひ避けていただきたい。

ひとつのやり方として、小・中学校の先生方との協調で、どういう文章で、どの程度のもを出したらいいのかということ、ぜひ教育長のところで決めていただいて、誰にでも読める市史づくりを心がけて、開かれた市史を作っていたきたいと思います。そんなことを考えておりますので、市長さん、教育長さん、よろしく願っています。

市長 ありがとうございます。背中を押されたというか、叱咤激励された部分が多くて、我々としても気を引き締めて、国分寺市制七〇周年に出来上がる目途でまいります。いずれにしても長丁場になりますけれども、先生方にはご苦労をおかけしますが、ひとつよろしくお願い申し上げます。

まずはご健康であられることが大事でありますので、ぜひ最後まで一緒に刊行に携われればと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。今後ともよろしく願っています。



対談された皆さま（左から荒井秀規氏・西木浩一氏・井澤邦夫市長・坂誥秀一氏・古屋真宏教育長・羽貝正美氏）

（出席者）

いざわくにお 国分寺市長

ふるやまさひろ 国分寺市教育委員会教育長

さかづめひでいち 立正大学特別栄誉教授
市史編さん推進委員会副委員長

あらいひでき 原始・古代・中世部会長
明治大学兼任講師

にしきこういち 近世・近現代部会長
東京都公文書館課長代理

はがいまさみ 東京経済大学現代法学部教授
現代市制部会長

（司会）

よだりよういち 市史編さん室長

【開催情報】

市制施行60周年記念 新たな国分寺市史編さん
事業着手記念トークセッション

テーマ：国分寺の過去・現在・未来

— 新たな国分寺市史編さん事業に向けて —

日時：令和六年四月一二日（金）

会場：国分寺市役所市長公室